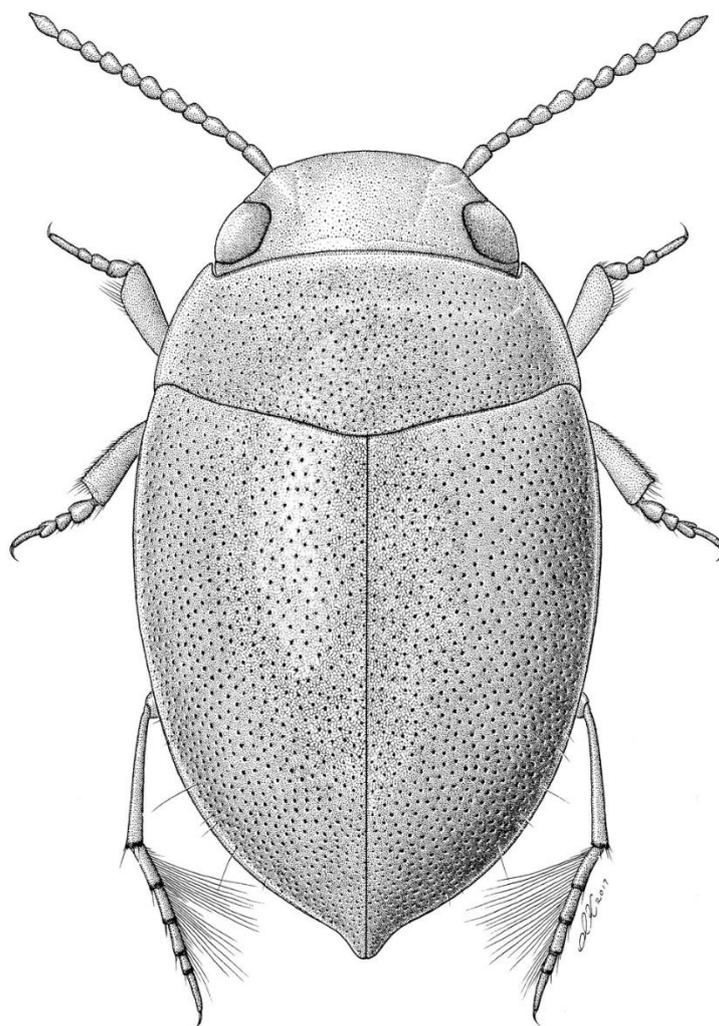


日本甲虫学会第8回大会

プログラム・講演要旨集

the 8th Annual meeting of the Coleopterological Society of Japan
Program and Abstract



会場：ふじのくに地球環境史ミュージアム
レイアップ御幸町ビル CSA 貸会議室
2017年11月25日（土）～26日（日）

目次

会場案内.....	3
お知らせ.....	4
講演要旨 公開講演会「海辺に生きる～海浜性・海岸性の甲虫たち～」.....	10
一般講演 口頭発表.....	12
ポスター発表.....	18
分科会.....	20
大会参加者名簿.....	21

日本甲虫学会第8回大会プログラム

第1日目：11月25日（土）レイアップ御幸町ビル CSA 貸会議室 5-C

評議員会	10:00-12:00
大会受付開始	12:00-
公開講演会	13:00-15:00
総会	15:00-16:00
学会賞授賞式・受賞講演	16:00-16:40
懇親会（ホテルセンチュリー静岡）	17:30-20:00

第2日目：11月26日（日）ふじのくに地球環境史ミュージアム

標本同定会	10:30-12:00
ポスター発表コアタイム	11:00-12:00
一般講演	13:00-15:45
分科会	15:00-16:00

大会会長 平井剛夫

大会事務局長 岸本年郎

事務局委員 浅野真・北野忠・島田孝・多比良嘉晃・長谷川道明・平井克男

会場案内

第1日目会場

レイアップ御幸町ビル CSA 貸会議室 5-C (5階)

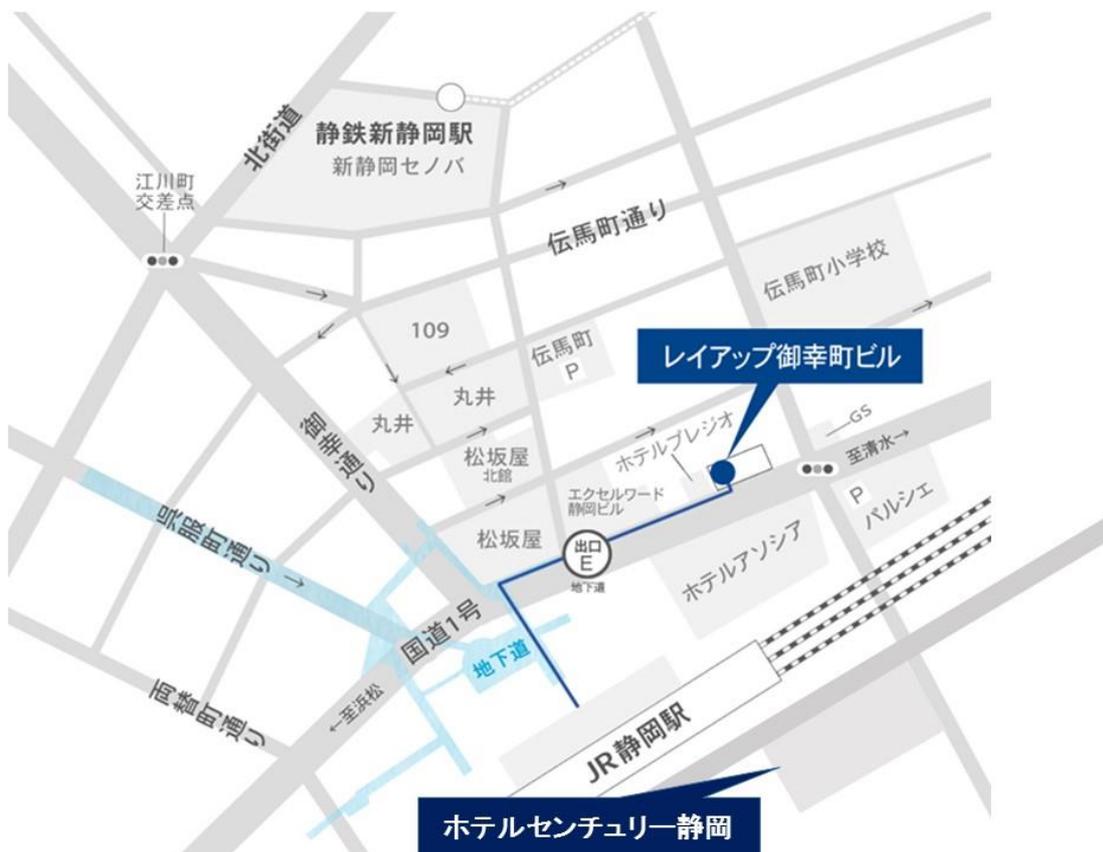
住所：静岡市葵区御幸町 11-8

懇親会会場

ホテルセンチュリー静岡 18F スカイスイート

住所：静岡市駿河区南町 18-1

tel. 054-284-0111



第2日目会場

ふじのくに地球環境史ミュージアム

住所：静岡県駿河区大谷 5762

tel. 054-260-7111

<行き>

2日目の朝は静岡駅南口スルガ銀行前から、チャーターした大型バスが出ます。

9:30 及び 10:30 出発（要事前予約）

また、路線バス「しずてつジャストライン」で、直通バスが運行しています。JR 静岡駅北口バスターミナル 8-B 番より、美和大谷線「ふじのくに地球環境史ミュージアム」行きに乗車、終点下車（所要時間約 30 分、運賃 360 円）

※ミュージアム行きの本数は少ないのでご注意ください。

静岡駅発ふじのくに地球環境史ミュージアム行（休日ダイヤ）

10:04, 10:52, 11:40, 12:52, 13:40, 14:52 発のバスがあります。

※また、同 8-B 番より「東大谷」行きに乗車「井庄」バス停下車、徒歩約 15 分（約 1 km）で来館可能です。（こちらは 1 時間に 2~3 本運行）

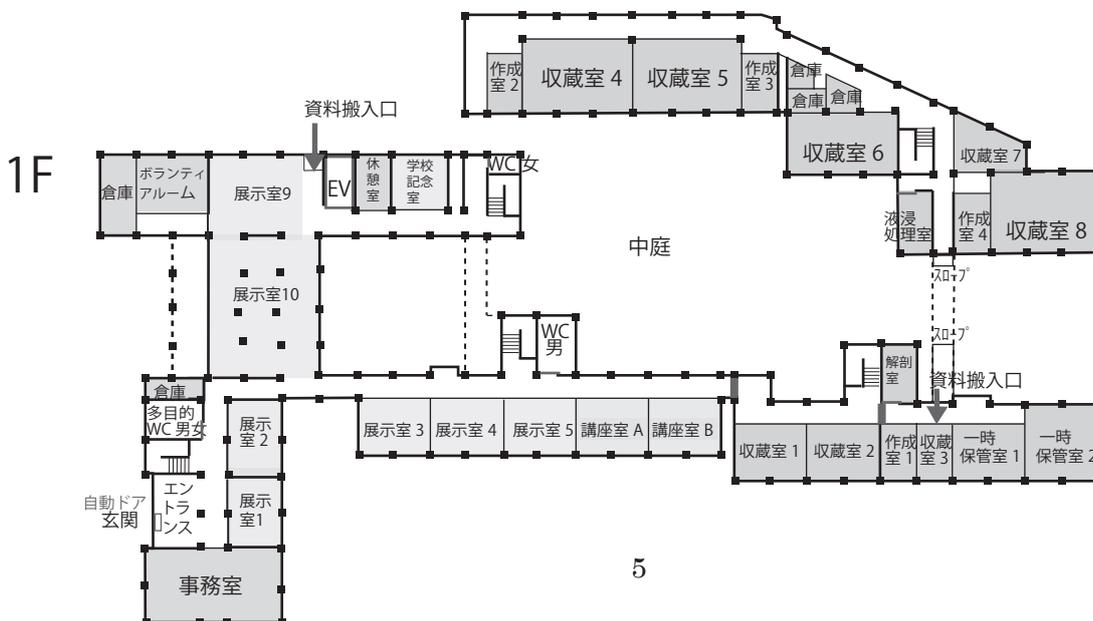
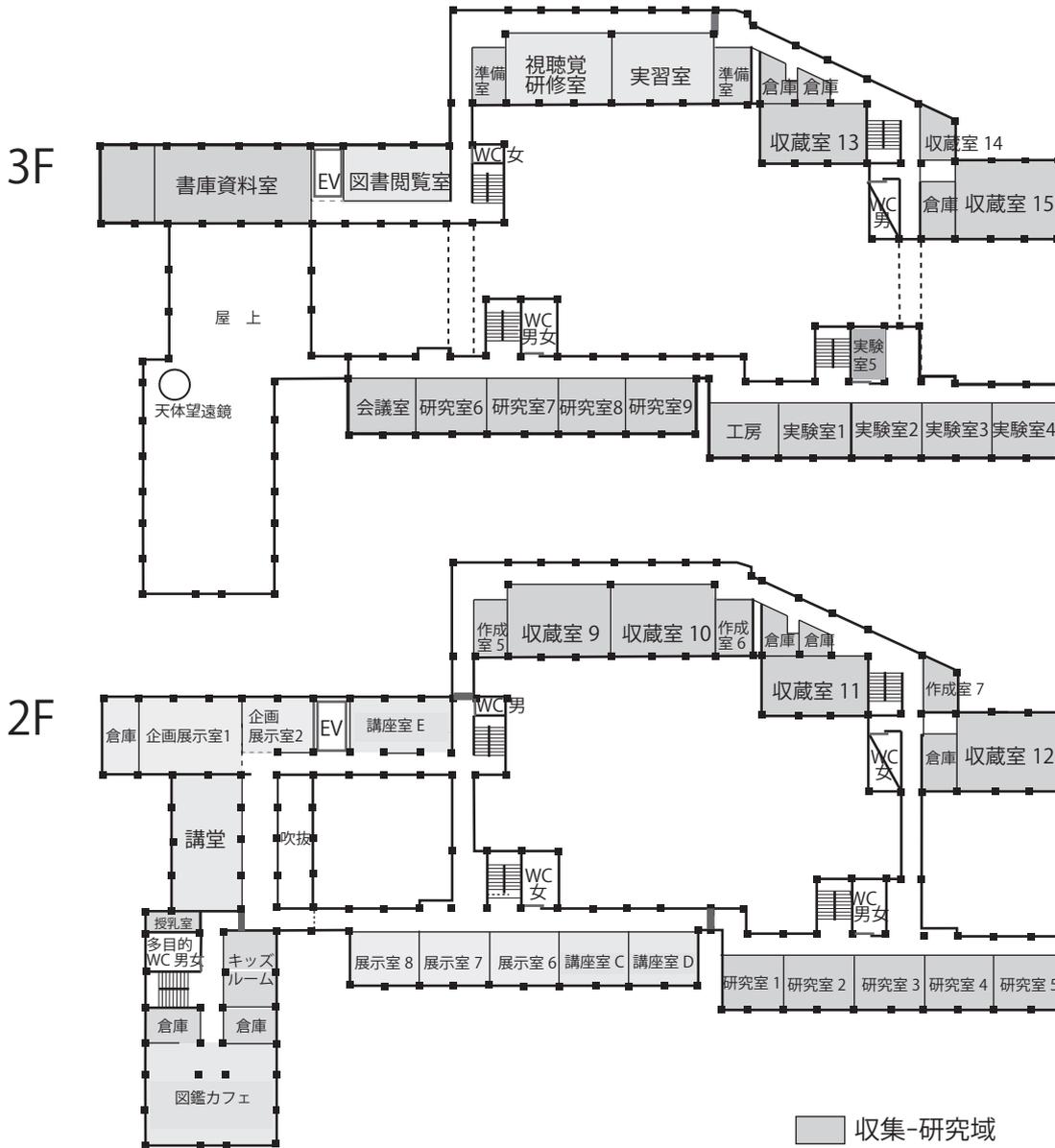
<帰り>

路線バスまたはタクシーでお帰りください。

路線バス：ふじのくに地球環境史ミュージアム発 17:29 もしくは「井庄」バス停から

タクシー：不二タクシー（054-255-1270）





お知らせ

口頭発表（一般講演）

1 講演あたり発表時間は質疑応答を含めて 15 分です。時間厳守をお願いいたします。1 鈴 10 分, 2 鈴 12 分, 3 鈴 15 分（終了）です。発表が終わりましたら, 次の講演の座長をお願いします。

ポスター発表

大会 2 日目の朝から掲示可能です。ご自身での掲示を御願いたします。画鋏は用意いたします。ポスター発表コアタイム時にはできるだけ会場での説明をお願いいたします。2 日目の分科会開催までにご自身での撤収をお願いいたします。

その他

ミュージアム内は原則飲食禁止です。休憩室（3F 実習室）以外での飲食はご遠慮ください。なお, 2F 図鑑カフェでは, カフェ内で購入した食料・飲料に限り飲食可能です。

館内は禁煙です。喫煙は正面玄関向かいの駐輪場奥にある喫煙スペースでお願いします。

ミュージアム展示室の見学は自由に行っていただけます。なお, 入館の際及び館内では学会大会参加証である名札を必ず着用いただくようお願いいたします。

第 1 日目 11 月 25 日 (土)

会議・総会

評議員会 10:00-12:00

総会 15:00-16:00

日本甲虫学会賞授賞式および受賞講演

16:00-16:40

2017 年度論文賞

受賞論文: FUJISAWA Yūsuke & Hiroaki KOJIMA (2016) A taxonomic revision of the menemehine weevils of the genus *Podeschrus* Roelofs (Coleoptera, Curculionidae, Conoderinae). *Elytra, new series*, 6(2): 201-214.

公開講演会「海辺に生きる～海浜性・海岸性の甲虫たち～」

13:00-15:00

S-1 大原昌宏: 環太平洋北部の海浜性甲虫類

S-2 高山浩司: 海辺に生きる植物 ～汎熱帯海流散布植物の進化史～

S-3 有本晃一: 流木に依存するコメツキムシ類の生態と分布

S-4 浅野真: 海岸に生息するクサジョウカイモドキ亜科

S-5 吉富博之: 岩礁に生息するチビドロムシ科

懇親会

17:30-20:00

ホテルセンチュリー静岡 18F スカイスイート (静岡市駿河区南町 18-1)

第2日目 11月26日(日)

同定会

10:30-12:00

ミュージアム3F 実習室

ポスター発表

11:00-12:00 (コアタイム)

ミュージアム3F 実習室前廊下

O-1

亀澤洋：橋下の乾燥地に生息する甲虫類

O-2

○初宿成彦・大阪市立自然史博物館外来生物プロジェクト：外来種ムネアカオクロテントウの分布拡大

O-3

○土肥聖知・楠見淳子・荒谷邦雄・細谷忠嗣：北部九州および周辺地域に分布するヒラタクワガタ二系統群の集団遺伝学的解析

一般講演：口頭発表

13:00-15:45

A会場（ミュージアム2F 講堂）

OA-1 13:00-

○星野光之介・細谷忠嗣・荒谷邦雄：日本列島と周辺地域におけるネブトクワガタ属 *Aegus* の分子系統および形態分類との比較

OA-2 13:15-

○荒谷邦雄・楠見淳子・三島達也・小田切頭一・田中良尚・細谷忠嗣：日本産タテヅノマルバネ（サンダースマルバネ）クワガタ種群の最近の話題

OA-3 13:30-

○朱雪姣・馬涛・温秀軍・久保田耕平：Genetic divergence of the genus *Platycerus* in East Asia based on nuclear and mitochondrial genes (I)

OA-4 13:45-

○伊藤哲成・吉富博之：東洋区におけるデバヒラタムシ属

OA-5 14:00-

榑島悠介：日本産コマルガムシ亜属の再検討（鞘翅目・ガムシ科）

OA-6 14:15-

林成多：水面生活に特化したタマガムシ幼生期の生態（続報）

OA-7 14:30-

○荻部治紀・北野忠：大東諸島の水生昆虫の今 —南大東での壊滅的な激減—

OA-8 14:45-

○小林憲生・稲荷尚記・大原昌宏：海浜性ケシガムシ類の食性の種間比較

B会場（ミュージアム 2F 視聴覚研修室）

OB-1 13:00-

伊澤和義：ルリイクビチョッキリ亜属の新種について

OB-2 13:15-

山迫淳介：ゴマフカミキリ亜属の分類学的再検討 ～タダゴマフは独立種か～

OB-3 13:30-

○末長晴輝・李奇峰・Jan Bezděk：アマミウスバハムシ属（ハムシ科:ヒゲナガハムシ亜科）の分類学的再検討

OB-4 13:45-

中田勝之：石川県白山周辺の好蟻性アリヅカムシ類の分布記録～特にゴジラツノアリヅカムシ等の再発見について～

OB-5 14:00-

○河上康子・山崎一夫・大橋和典：気候温暖化によるダンダラテントウの夏季の活動の減少

OB-6 14:15-

○小林卓也・曾田貞滋：菌食性ツツキノコムシ科甲虫の寄主利用パターン

OB-7 14:30-

○十川晃一・吉富博之：日本産ヨツボシテントウダマシ属の再検討

分科会

15:00-16:00

☆ゴミムシ分科会 <世話人：森田誠司>（ミュージアム 3F 実習室）

☆カミキリムシ分科会 <世話人：山迫淳介>（ミュージアム 2F 講堂）

- ・三浦康至：北遠地方の水窪町に於けるカミキリムシの現状と過去について
- ・杉本可能：大井川流域のカミキリ

☆ゾウムシ分科会 <世話人：的場績>（ミュージアム 3F 会議室）

☆ハネカクシ分科会 <世話人：野村周平>（ミュージアム 3F 研究室 6）

- ・野村周平：東京都区内の都市緑地におけるアリヅカムシ相の比較
- ・島田孝：日本未記録属 *Planeustomus* 属（セスジハネカクシ亜科）について

☆雑甲虫分科会 <世話人：生川展行>（ミュージアム 3F 研究室）

- ・吉田貴大：幼虫の魅力

講演要旨

公開講演会「海辺に生きる～海浜性・海岸性の甲虫たち～」

S-1 環太平洋北部の海浜性甲虫類

○大原昌宏（北海道大学・総合博物館）・小林憲生（埼玉県立大学・共通教育科）

日本から、千島列島、アリューシャン列島、アラスカ、カナダ、アメリカ西海岸にかけて、約16000キロメートルに渡る環太平洋北部の海岸線が繋がっています。日本（アジア）は動物地理区分では旧北区に含まれ、アメリカ大陸の新北区とは区別され、それぞれに生息する動物は異なると考えられています。では、日本からアメリカまで連続した海岸線に生息する生物は、異なっているのでしょうか。私たちは海浜に生息する昆虫・甲虫類について、日本からアメリカにかけてどのように昆虫相が変化していくのかを調査しました。その結果、北部ではアジアとアメリカでより近縁な種が分布し、緯度が下がるにつれより遠縁な異なる種となることがわかりました。しかし、アジアとアメリカに共通種がいることが発見され、津波で発生した瓦礫になどで運ばれた可能性も示唆されました。またアジアとアメリカの海浜性甲虫は、種は異なりますが、体サイズや生態がよく似ていることがわかり、太平洋を隔てた海浜にパラレルワールドのような、よく似た昆虫の生き様（群集構造）があることがわかりました。アジアとアメリカ大陸の海岸を比較しながら、海浜性甲虫についてご紹介したいと思います。

S-2 海辺に生きる植物 ～汎熱帯海流散布植物の進化史～

高山浩司（ふじのくに地球環境史ミュージアム）

多くの陸上植物にとって、海は分布拡大の「障壁」となっている。ところが、汎熱帯海流散布植物と呼ばれる植物は、海を種子散布の「回廊」として利用することで、広大な分布域を獲得することに成功した。ヒルガオ科のグンバイヒルガオ、マメ科のナガミハマナタマメ、ハマアズキ、アオイ科のオオハマボウやアメリカハマボウ、ヒルギ科のヤエヤマヒルギ属がその代表例である。私は、汎熱帯海流散布植物の広大な分布域がいつ頃形成され、実際にどのような長距離種子散布が生じているのかを明らかにするために、全球規模の野外調査と分子マーカーによる解析に基づく系統地理学的・集団遺伝学的研究を実施してきた。本発表では、オオハマボウとヤエヤマヒルギ属の研究成果を中心に、1) 汎熱帯海流散布植物の誕生と分布形成の歴史、2) ”超”長距離種子散布の実態とその帰結、3) 海流散布植物の内陸適応等について議論したい。

S-3 流木に依存するコメツキムシ類の生態と分布

有本晃一 (JT 生命誌研究館)

コメツキムシ科 Elateridae は森林に生息する種が過半数を占めるが、日本の海岸からは 5 亜科が確認されている。中には、流木下から得られている種も知られ、生活史の一部を流木に依存している可能性が示唆されるが、詳細な生態は判明していなかった。そこで演者は、種子島と沖縄島、石垣島、西表島、黒島の砂浜において流木に潜むコメツキムシ類の生態調査を行うとともに、得られた種の分布記録を整理した。本調査では、ヒサマツチビコメツキ *Neodrasterius hisamatsui* (以下ヒサマツ) とツヤチャイロヒラアシコメツキ *Suzukielater babai* (以下ツヤ)、カデサホソキコメツキ *Procraterus kadesanus* (以下カデサ) を流木より得た。ヒサマツとツヤの成虫は夜行性で日中は流木内に潜んでいる。また、ツヤは幼虫も流木内から得ており、生活環が砂浜内で回っていることが判明した。カデサの成虫でも同様の行動が観察されたが、過去に日中の訪花例が報告されており、明確な日周性を示さない可能性も考えられた。ツヤは北海道から屋久島まで分布し、北米に近縁種を有する、一方、ヒサマツは奄美大島以南、カデサは沖縄島以南に分布し、それぞれ東南アジアに近縁種を有する。よって、3 種はニッチが同じだが、分布拡大の歴史は異なることが示唆された。

S-4 海岸に生息するクサジョウカイモドキ亜科

浅野真 (帝装化成)

これまで、世界で 3 属約 40 種のクサジョウカイモドキ亜科甲虫が海岸の岩礁から発見されている。岩礁は、直射日光や強風により灼熱や乾燥に晒され、波浪や干満により水没と乾燥を繰り返す、昆虫が生活するにはあまりに過酷な環境のように思われるが、どうして、このような環境で生存が可能なのだろうか？

海岸を含め様々な環境に生息する本亜科数種の生態を調べ、比較してみると、食性や発育において、植物に依存性の高い種と、低い(又は生涯全く植物に関与しない)種が存在することが分かる。後者は、植生の乏しい不毛な環境で生涯を過ごすか、上位の生態的地位にいると考えられる。さらに、1 回あたりの産卵数は少なく、卵には高い耐乾性がみられ、成虫の出現期間は長いといった、顕著な特徴を持つことも明らかになってきた。

海岸岩礁など攪乱の多い不毛な乾燥地は、本来甲虫にとって生存困難な環境である一方、競争は少なく、本亜科においては過酷な環境でも繁栄し種分化が進んでいる。こうした環境で生存していく上で有利な生態的形質を有することは、カッコウムシ上科最大のグループである、本亜科における多様化の一要因となっているのかもしれない。

S-5 岩礁に生息するチビドロムシ科

吉富博之（愛媛大・農・昆虫）

チビドロムシ科 Limnichidae は、世界から 4 亜科約 400 種が知られ、河川周辺や海岸の岩礁、森林のリター、樹木の幹部などに生息する種が存在する。日本からは 4 亜科全てが確認されているが、本科の単系統性は疑わしいとされ、亜科の系統関係も不明である。本科の概略と系統関係を示し、最近の研究で明らかになりつつある日本とその周辺に生息する岩礁性の種を紹介する。

一般講演 口頭発表

A 会場（ミュージアム 2F 講堂）

OA-1 日本列島と周辺地域におけるネブトクワガタ属 *Aegus* の分子系統および形態分類との比較

○星野光之介（九大・院・地社）・細谷忠嗣（九大・院・決断セ）・荒谷邦雄（九大・院・比文）

ネブトクワガタ *Aegus laevicollis* Saunders, 1854 は中国大陸から台湾・日本列島・朝鮮半島に掛けて分布するクワガタムシ科の一種である(鈴木ら, 2012)。本種は長らく複数の亜種を含む広域分布種とされてきた(永井, 1994; 鈴木ら, 2012 他)が、藤田(2010)や Huang and Chen(2017)ではいくつかの亜種を独立種として扱っており、研究者によって種・亜種分類について見解の相違が見られる。また分子系統学的研究を欠いており分類群間の系統関係も不明であった。そこで演者らは日本列島と朝鮮半島、台湾の *A. laevicollis* および同地域に分布する近縁な *Aegus* の種についてミトコンドリア DNA を用いて系統推定を試みた。また Huang and Chen(2017)で検討されていない亜種を含めた雌雄交尾器形態を観察し、分子系統樹との比較検討を行った。その結果、沖縄本島から日本本土・朝鮮半島にかけての集団と八重山・台湾の集団は系統が大きく異なり、さらに広域分布種としての *A. laevicollis* が単系統群ではないことが示された。

OA-2 日本産タテヅノマルバネ（サンダースマルバネ）クワガタ種群の最近の話題

○荒谷邦雄・楠見淳子・三島達也・小田切頭一（九大・院・比文）・田中良尚（伊丹市昆虫館）・細谷忠嗣（九大・院・決断セ）

マルバネクワガタ属はアジアの熱帯・亜熱帯地域に約 70 種が分布しており、日本では本属の分布域の北・東限にあたる奄美以南の琉球列島に 4 種が生息している。このうち、タ

テヅノマルバネ（サンダースマルバネ）種群とされるアマミ（亜種ウケジマを含む）、オキナワ、ヤエヤマ（亜種ヨナグニを含む）の 3 種は大型で、幼虫が大径木の樹洞や根際に溜まった腐植物を食べるため、森林伐採等による生息環境の消失や過剰な採集による個体数の減少が近年特に深刻化した。そのため平成 23 年にヨナグニ、平成 28 年にウケジマとオキナワが「種の保存法」に基づく「国内希少野生動植物」に指定されたほか、アマミ、ヤエヤマの各名義タイプ亜種も自治体の条例で保護されている。また、在来タクサとの交雑や競合が懸念されるサンダースマルバネなど外国産の近縁種は「特定外来生物」に指定される予定である。こうした状況下、演者らは、日本産タテヅノマルバネ種群の保全のための基礎データの収集に取り組んできた。本講演では、これまでの一連の調査・研究で得られた日本産タテヅノマルバネ種群の分布、分類、系統、集団遺伝、生理、生態、行動等に関する多くの新知見について紹介する。

OA-3 Genetic divergence of the genus *Platycerus* in East Asia based on nuclear and mitochondrial genes (I)

（核遺伝子とミトコンドリア遺伝子にもとづいた東アジアにおけるルリクワガタ属の遺伝的分化 (I)

○朱雪姣（東大・院農）・馬涛・温秀軍（華南農業大・森林保護）・久保田耕平（東大院・農）

Platycerus is widely distributed in China, Korea and Japan. There is only one species of *Platycerus* (*Platycerus hongwonpyoi*) distributed in Korea, ten species are distributed in Japan, and about 27 species are reported in China. In 2016, we collected *Platycerus* in five sites of Shanxi and Sichuan provinces (China). Of them, we got eight species of *Platycerus*. We analyzed two nuclear genes (Wingless and ITS) and one mitochondrial gene (COD). We aim to clarify the phylogeographic relationship of this genus between the continental area (China and Korea) and islands (Japan). We estimate the divergence times of major clades. We also focus on the postero-lateral corners of beetle pronotum, and discuss about the evolution of R (round) type and S (sharp) type.

OA-4 東洋区におけるデバヒラタムシ属

○伊藤哲成・吉富博之（愛媛大・農・昆虫）

デバヒラタムシ科は、*Drycora* 属と *Prostomis* 属の 2 属が知られている。このうち *Prostomis* 属は、東洋区から 13 種、オーストラリア区から 10 種が記録され、世界で合計 27 種が記録されていた。今回、愛媛大学ミュージアムの標本を検した結果、沖縄島、八重山諸島、台湾からそれぞれ 1 新種、ラオス、インドネシア（スラウェシ）からそれぞれ 2 新種、合計 7

新種を追加した (Ito & Yoshitomi, 2016, 2017, 投稿中). また, 本研究により東洋区にはさらに新種が分布している可能性があることが示唆された.

OA-5 日本産コマルガムシ亜属の再検討 (鞘翅目・ガムシ科)

簗島悠介 (北九州市立自然史・歴史博物館)

コマルガムシ亜属は, Chaetarthriinae 亜科コマルガムシ属に含まれ, 和名の通り小さくまるい体型をしたガムシである. これまで日本から 4 種が知られているものの, 2 種 (*C. apicalis* と *C. kanyukovae*) は標本の情報なく記録された分布疑義種である. 残りの 2 種 (コマルガムシ *C. japonica* とキタコマルガムシ *C. hokkaidensis*) は, それぞれ長野県と北海道の標本を基に記載されたが, この 2 種を識別する形質については曖昧なままである. 本研究では, これらの問題を解決することを目的として, 日本, 及び極東アジア地域のコマルガムシ亜属について観察を行った. 結果として (1) コマルガムシ・キタコマルガムシ共に分布疑義種 *C. apicalis* のシノニムである. (2) *C. kanyukovae* は日本産の標本が発見できなかったため, 分布記録は単純な原稿のミスである可能性が高い. (3) 本州に *C. apicalis* によく似た未記載種が存在することが分かった.

OA-6 水面生活に特化したタマガムシ幼生期の生態 (続報)

林成多 (ホシザキグリーン財団)

タマガムシ *Amphiops mater* Sharp は, 卵・幼虫・蛹の時期を水面や水面近くで過ごす生活史を持つ特異なガムシ類である. このような特殊な生態を持つことから, 幼虫の食性にも特異性がある可能性が考えられたことから, 改めて飼育を行った. 飼育の結果, 水面生活者であるアメンボ科幼虫やホソカ科幼虫を与えてみたものの, 幼虫は捕食しなかった. もっとも良く食べたのはミジンコ類であり, 水面付近を遊泳する個体を捕まえて食べていた. 野外でもミジンコ類が重要な餌である可能性がある一方, 特異的に捕食する生物は存在しない可能性が高い. また, 本種の蛹は, 水面付近の植物に付着するが, 水面の震動で容易に基質から離れてしまう. そこで, 水面に浮いた状態の蛹を観察したところ, 全く問題なく成虫が羽化した. この性質も, 本種が水面生活に特化していることを示している.

OA-7 大東諸島の水生昆虫の今 —南大東での壊滅的な激減—

○ 苅部治紀 (神奈川県博)・北野忠 (東海大・教養)

大東諸島は, 沖縄島の東約 340 キロに位置する島々で, 北大東, 南大東, 沖大東 (無人島) の 3 島からなる. 隆起サンゴによる島々であり, 琉球列島の中では唯一の, 国内でも小笠原諸島と並ぶ海洋島である. 地史的な特異性から, 昆虫類でもダイトウマメクワガタ, ヒサマ

ツサイカブト、ダイトウヒメハルゼミなどの固有種、固有亜種が知られている。また、マダラゲンゴロウ、コフキオオメトンボの国内唯一の分布地であるなど（後者はその後西表島と周辺島嶼で記録）、生物地理の面からも興味深い地域である。

演者らは、2008年に南北大東島を訪れて、水生甲虫を中心とした水生昆虫全般の調査を行ったことがある。南大東島は、島中央部に多数の池沼や湿地が存在しており、マダラゲンゴロウは確認できなかったものの当時は29種の水生甲虫を確認することができ、供給源となりうる島々から遠く離れた島でありながら、水田の消滅など劣化が進行する南西諸島の中では、個体数も豊富な島であった。しかし、本年度9年ぶりに同諸島の調査を実施したところ、南大東島で壊滅的ともいえる水生昆虫相の激減が確認されたので、現在推察される減少要因とともに現状を紹介する。

OA-8 海浜性ケシガムシ類の食性の種間比較

○小林憲生（埼玉県立大学・共通教育科）・稲荷尚記・大原昌宏（北海道大学総合博物館）

ガムシ科ケシガムシ属（Hydrophilidae, *Cercyon* (*Cercyon*）は、海浜環境に適応した甲虫の一群で、日本では6種類、北米でも日本とは異なる数種類の海浜性ケシガムシ類が報告されてきた。これらの成虫は海岸に打ち上げられたコンブ、ワカメ等の海藻、およびアマモなどの海草の植物遺骸の下に出現する。しかし、実際にどのような植物遺骸を餌資源としているかについて十分な検討はされていなかった。本研究では、日本及び北米産の計4種類の海浜性ケシガムシの食草受容性実験を行った結果を報告する。

日本産のフチトリケシガムシ (*C. (C.) dux* SHARP) は、緑藻類、褐藻類など藻類を餌植物とするものの、高等植物である海草（アマモ等）に対しては摂食行動を示さなかった。その一方、北米産の *C. (C.) tofino* HATCH は、緑藻類、褐藻類など藻類を餌植物とするだけでなく、海草も餌資源としていた。また、同様の傾向は北米産のケシガムシ *C. (C.) fimbriatus* でも認められ、緑藻類、褐藻類など藻類を主な餌植物とするものの、海草も有る程度受け入れており、海浜性ケシガムシ類の中でも餌資源に種間変異が認められることが明らかになった。

B 会場（ミュージアム 3F 視聴覚研修室）

OB-1 ルリイクビチョッキリ亜属の新種について

伊澤和義（岐阜県多治見市）

日本のルリイクビチョッキリ亜属 *Caenorhinus* は2種 *Deporaus* (*Caenorhinus*) *mannerheimi* (Hummel, 1823), *D. (C.) eumegacephalus* Sawada, 1993 と考えられてきたが、極めてよく似た別種が混ざっていることが判明したので、これを新種としてメダカルリ

イクビチョッキリと命名する予定である。トカラ列島産のものは若干特徴の違いが認められるため、新亜種トカラリイクビチョッキリとする予定である。ルリイクビチョッキリに酷似しており、判別は頭部形状の違いによるが微妙ではある。生態はルリイクビチョッキリが初夏から夏にかけて比較的寒冷地、山地のヤナギ、カバ類見られるのに対し、メダカルリイクビチョッキリは春暖地のシイ、カシ類で採れるという違いがある。

OB-2 ゴマフカミキリ亜属の分類学的再検討 ～タダゴマフは独立種か～

山迫淳介（東大院・総合文化）

ゴマフカミキリ *Mesosa (Mesosa) japonica* は、その学名の通り日本を代表するカミキリムシの一つである。しかし、その分類学的位置は、大陸産の近縁種である *M. (M.) myops* の亜種、またはシノニムとされることもあり、研究者の間でも意見が分かれている。演者は、本種を含むゴマフカミキリ亜属 (*Mesosa s. str.*) の分類学的再検討を行う過程で、本種及び大陸に分布する近縁種には明瞭な差異が見いだせず、ヨーロッパから東アジアまで広域に分布する同一種であるとの結論を得た。また、予備的な解析の結果、中国中南部に起源をもつ本種が、その後北方地域に進出しヨーロッパから東アジア地域にまで及ぶ広域な分布を獲得するに至ったと推察された。本講演では、ゴマフカミキリ亜属の分類学的問題点を紹介するとともにゴマフカミキリの分類学的地位について考察する。

OB-3 アマミウスバハムシ属（ハムシ科：ヒゲナガハムシ亜科）の分類学的再検討

○末長晴輝（倉敷市役所）・李奇峰（Taiwan Agricultural Research Institute）・Jan Bezděk（Mendel University）

アマミウスバハムシ属（ハムシ科ヒゲナガハムシ亜科）は琉球列島から東南アジア、オーストラリアにかけて分布しており、26種が知られている（Raid & Nally, 2008; Lee et al., 2012）。日本国内ではアマミウスバハムシ *Menippus issikii* (Chujo, 1961) ただ1種が奄美大島と喜界島、沖縄島から知られている。今回、石垣島から本属の不明種が得られたことから再検討を行った結果、沖永良部島と沖縄島から1新種、トカラ悪石島と八重山諸島から1新種をそれぞれ認めた。これらの種は前胸の斑紋や脚の色のほか、雄交尾器基片や内骨片および雌貯精囊により区別できる。特にアマミウスバハムシと沖永良部島及び沖縄島の未記載種は外見上非常によく似ているが、雄交尾器基片にわずかな違いが見られるほか、貯精囊の形が明らかに異なっている。トカラ悪石島と八重山諸島の未記載種は分布が大きく離れていたものの、雌雄交尾器を含め形態的な違いが見られないことから現時点では同種として扱うこととした。これにより、日本産アマミウスバハムシ属は2新種を含む3種に整理された。

OB-4 石川県白山周辺の好蟻性アリヅカムシ類の分布記録

～特にゴジラツノアリヅカムシ等の再発見について～

中田勝之（金沢市）

2014年から2017年にかけて、白山国立公園区域の特別保護地区以外で、好蟻性アリヅカムシ類（以下「アリヅカ。」）及び寄主アリ類（以下「アリ。」）の調査を行った。調査方法は、公園区域内の加賀禅定道ほかで、登山道脇の石の下等のアリの巣からアリ及びアリヅカを見つけ採りの後、マウント及び同定を行った。

その結果、6属8種95個体のアリヅカ及び5属8種95個体のアリが確認され、アリヅカには原記載以降記録のなかったゴジラツノアリヅカムシ等が含まれる。

今回、採集されたアリヅカ及びアリの水平、垂直分布及び両者の共生関係を、また、アリヅカ個体数の約78%（74個体）を占めるヨコヅナトゲアリヅカムシとアリとの詳細な共生関係も併せて報告する。

（調査結果1：アリヅカリスト（和名末尾の「アリヅカムシ」を略））ゴジラツノ、ハクサンツノ、ジョウエツツノ、ヨコヅナトゲ、エグリチイロ、ツヤクサアリ、ヤマトヒゲブト属の1種、オオヒゲカタ。

（調査結果2：アリリスト（和名末尾の「アリ」を省略））クロヤマ、アカヤマ、クロクサ、ヒゲナガ、キイロケ、ヤマトアシナガ、シワクシケ、アミメ。

OB-5 気候温暖化によるダンダラテントウの夏季の活動の減少

○河上康子（大阪市博・外来研）・山崎一夫（大阪市立環境研）・大橋和典（豊中市）

近年、気候温暖化に伴う昆虫の分布拡大が多く報告されている。日本でもこれまでにナガサキアゲハ、タテハモドキ、ハスモンヨトウ、ミナミアオカメムシほか多くの種で確認されている。このような分布拡大では、拡大の過程で化性或活動季節など気候適応に関連した昆虫の形質変化をともなう可能性がある。ダンダラテントウ *Cheilomenes sexmaculatus* は1910年代から1990年代初頭にかけて、日本の九州地方から関東、北陸地方に分布を拡大した(Kawakami et al. 2014)。そこで、1949年から2004年の期間に関西地方で採集された本種265個体の標本調査をおこない、採集月の経年変化を調べた。その結果、夏季（7-8月）の採集記録は減少し2000年以降は全く記録されなかった。いっぽう、関西地方の年平均気温はこの期間中上昇の傾向があった。本種の活動は餌資源であるアブラムシ類の在否の影響を受ける。アブラムシ類は暑い気象条件では出現しないため、ダンダラテントウはアブラムシ類が不足することにより、近年の夏季の活動を制限された可能性が考えられた(Kawakami and Yamazaki 2017)。

OB-6 菌食性ツツキノコムシ科甲虫の寄主利用パターン

○小林卓也・曾田貞滋（京大・院理）

ツツキノコムシ科 Ciidae は全生活史を多孔菌類に依存し、分類群ごとに利用する寄主菌類のグループがある程度決まっていることが知られている。しかしながら寄主菌類の属や種レベルでの寄主特異性に関する知見は極めて少ない。カワラタケ類は日本の森林においてもっとも普通にみられる木材腐朽菌類のひとつであり、ツツキノコムシ類も多くの種が寄主として利用している。本研究ではカワラタケ類を主な寄主とするツツキノコムシ属 *Cis* 及びツヤツツキノコムシ属 *Octotemnus* について寄主利用パターンの種間での違いを探った。その結果 *Octotemnus* 属では種間でかなり明瞭な利用寄主の違いが寄主の種レベルでみられた。*Cis* 属においても *Octotemnus* 属ほど厳密ではないものの種間でカワラタケ類の種ごとに利用する頻度に違いがみられた。ツツキノコムシ類において寄主菌類の種レベルで利用パターンが異なるのは一般的な現象かもしれない。

OB-7 日本産ヨツボシテントウダマシ属の再検討

○十川晃一・吉富博之（愛媛大・農・昆虫）

ヨツボシテントウダマシ属 *Ancylopus* は、これまで日本から普通種のヨツボシテントウダマシと Strohecker (1972) が記録したベニヨツボシテントウダマシの 2 種が知られてきた。日本から採集された約 500 個体の標本を基に再検討した結果、広域に分布するヨツボシテントウダマシのほか、東日本からベニヨツボシテントウダマシを再確認し、福島県から日本初記録のニセヨツボシテントウダマシ（和名新称）を確認した。これらの種はたいへんよく似ているが、雄交尾器のほか雄脛節や雌前胸背板の形状で識別できるほか、鞘翅の斑紋でもある程度は区別できる。

ポスター発表（ミュージアム 3F 視聴覚研修室）

O-1 橋下の乾燥地に生息する甲虫類

亀澤洋（株）環境指標生物

大河川に架かる橋下には乾燥環境が存在する。橋が屋根の役割を果たすため、直接には雨が降らず、乾いた砂泥地に礫、石が転がる裸地となっていることが多い。今回、演者は関東平野において野外調査を実施するとともに、文献上の既記録を拾い、橋下の乾燥環境からどのような甲虫が見いだされるのかを調べた。その結果、橋下の乾燥地においては、ヒョウホンムシ科ヒョウホンムシ亜科、カツオブシムシ科、ゴミムシダマシ科で、家屋内からの発見例が多い傾向のある種が少なからず見つかることが判明した。また、内陸部の橋下においても、キイロヒメテントウ、ハマベキクイゾウムシのように海岸部での発見例が多い種がわずかに含まれていた。

O-2 外来種ムネアカオクロテントウの分布拡大

○初宿成彦（大阪市立自然史博物館）・大阪市立自然史博物館外来生物プロジェクト
(Project A)

中国南部から台湾が原産のムネアカオクロテントウ *Synona consanguinea* Poorani, Slipinski et Booth, 2008 が 2014 年に東京都で、2015 年に神奈川県と大阪府で、記録された（中西ら 2016、齋藤ら 2016）。オレンジと黒の目立つ大型のテントウムシであることから、インターネット等を通じて広く分布情報募集を呼びかけたところ、昆虫研究者以外の一般の方も含め、確認のデジタル写真などとともに多くの情報が集まった。

分布の源は関東では多摩川沿い、関西では大阪府の石川沿いの 2 つであるように見え、2017 年 10 月中旬までに群馬県、和歌山県、奈良県、京都府でも確認された。

野外では繁殖力旺盛なクズ（葛）上のマルカメムシを捕食しているのを見ることが多い。クズは日本から外来種として入った北米では有害植物となっている。国内ではマルカメムシのほか、オジロアシナガゾウムシ、クズノチビタマムシなど在来の摂食者の存在によって繁殖が抑えられていると考えられるが、そのひとつのマルカメムシがムネアカオクロテントウの捕食によって減少することで、クズがさらに蔓延することが懸念される。

0-3 北部九州および周辺地域に分布するヒラタクワガタ二系統群の集団遺伝学的解析

○土肥聖知(九大・院・地社)・楠見淳子・荒谷邦雄(九大・院・比文)・細谷忠嗣(九大・決断科学センター)

従来、北部九州には日本本土に分布する日本亜種 *D.t.pilifer* (以下ホンド系統群) が分布していると考えられてきたが、ミトコンドリア DNA の CO 領域の解析から北部九州の一部地域に対馬、壱岐、五島列島のそれぞれに分布する対馬亜種 *D.t.castanicolor*、壱岐亜種 *D. t. tatsutai*、五島列島亜種 *D. t. karasuyamai* に相当する個体群(以下ツシマ系統群)の一部が侵入している可能性があることが示唆された。後者の 3 亜種は互いに形態が似ており、分類学的問題も指摘されている。こうした現状にあって本研究では、北部九州におけるこれら二系統群間の遺伝子浸透の有無およびツシマ系統群の侵入状況を明らかにすることを目的とし、遺伝的集団構造の解析を行った。その結果北部九州のヒラタクワガタを対象にしたミトコンドリア DNA の COI 領域を用いた解析では、ツシマ系統群とホンド系統群に分かれることがわかり、先行研究の結果と一致した。また核遺伝子のマイクロサテライト多型を用いた帰属性解析では対馬、壱岐・五島列島、北部九州、南部九州の大きく 4 つのグループに分けられる可能性があることが示され、北部九州にはツシマ系統群のうち、地理的に近い壱岐・五島列島亜種の個体群の一部が分布していると考えられた。

分科会

☆ゴミムシ分科会 <世話人：森田誠司> (ミュージアム 3F 実習室)

☆カミキリムシ分科会 <世話人：山迫淳介> (ミュージアム 2F 講堂)

- ・三浦康至：北遠地方の水窪町に於けるカミキリムシの現状と過去について
- ・杉本可能：大井川流域のカミキリ

☆ゾウムシ分科会 <世話人：的場績> (ミュージアム 3F 会議室)

☆ハネカクシ分科会 <世話人：野村周平> (ミュージアム 3F 研究室 6)

- ・野村周平：東京都区内の都市緑地におけるアリヅカムシ相の比較
- ・島田孝：日本未記録属 *Planeustomus* 属 (セスジハネカクシ亜科) について

☆雑甲虫分科会 <世話人：生川展行> (ミュージアム 3F 研究室)

- ・幼虫の魅力

吉田貴大 (九大院・生資源・昆虫)

演者は、雑甲虫の同定の難易度の高さは、雑甲虫の最大の欠点であり最大の魅力であると考えている。科すら見当のつかない得体の知れない種と遭遇した際に感じる、感動なのか動揺なのか判別の付かない感情に取り憑かれ、雑甲虫屋を名乗り始めた者は演者だけではないと予想している。しかしながら、そのような得体の知れない甲虫に魅力を感じる諸賢方でも、その幼虫に興味を持つ方は限りなく少ないように感じる。その背景には、成虫と異なる保存方法が求められる点や同定の方法が分からない点などがあると思われる。

演者は、ホソヒラタムシ科を中心とした雑甲虫の幼虫に注目して、わずか5年ほどであるが、大変興味深い未知の事象をいくつか発見することができた。これらの未知との遭遇には、雑甲虫そのものに対して感じた魅力に通ずるものがあり、雑甲虫屋の方々にもこの感動が伝わることを確信した。そこで、本講演では、幼虫研究に必要な準備や同定の方法を簡単に解説したうえで、ホソヒラタムシ科、チビヒラタムシ科、オオキノコムシ科などの幼虫・蛹に関して、演者が発見した未知の事象を紹介する。

大会参加者名簿

(2017年11月16日現在：五十音順)

青木哲郎	亀澤洋	高橋和弘	平野幸彦
秋田勝己	苅部治紀	竹本拓矢	藤澤侑典
浅野真	河上康子	田中努	藤本博文
足立一夫	川瀬英夫	田中敏明	星野光之介
荒谷邦雄	官能健次	田中良尚	細川浩司
有本晃一	岸本年郎	多比良嘉晃	細谷忠嗣
有本久之	北野忠	樽宗一朗	前川和則
安藤清志	久保田耕平	露木繁雄	松島良介
池竹弘旭	黒田悠三	出嶋利明	の場績
池田大	小西宏明	土肥聖知	三島達也
伊澤和義	小林卓也	土井学	宮内博至
伊藤建夫	小林憲生	戸田尚希	元永学
伊藤哲成	斉藤明子	中田勝之	森井隆文
稲畑憲昭	齋藤理	生川展行	森田誠司
岩田隆太郎	斎藤修司	新里達也	山崎孝史
井上晶次	斉藤秀生	西川勝	山迫淳介
今田舜介	佐藤隆志	西原昇吾	山本捺由他
上木岳	佐藤陽路樹	能瀬晴菜	山本ひとみ
内田脩太	司村宜祥	野津裕	横関秀行
大木裕	下野誠之	野村翔太	吉田正隆
大林延夫	初宿成彦	橋村正雄	吉富博之
大原昌宏	朱雪姣	長谷川道明	吉原一美
岡田亮平	末長晴輝	林成多	渡辺崇
岡野良祐	鈴木互	林靖彦	渡辺泰明
奥田好秀	関口俊	雛倉正人	渡辺黎也
小野広樹	十川晃一	平井克男	
上手雄貴	高井泰	平井剛夫	